

日本コトバの会・大人のつづり方教室編

もんぺと鉄かぶとの青春

—— 父母が子に語り伝える戦争体験 ——



もんべと鉄かぶとの青春

¥ 980 千 160

1975年7月25日 初版

編 者 日本コトバの会
大人のつづり方教室

発行者 鈴木 大吉

〒101 / 東京都千代田区西神田1-3-6

発行所 株式会社 一 光 社

電話 東京 (292) 8723

振替番号 東京 181221

印刷所 アオキ印刷株式会社

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

日本コトバの会・大人のつづり方教室編

もんぺと鉄かぶとの青春

一 光 社

さらに語り伝えて戦争だけはやめさせよう

戦争の悲惨は多くの側面から語ることができます。中でも、直接に敵と戦い、または戦災を被った人々自身の体験は、再び戦争を起こさせないための強い戒しめとなるものです。

昭和十六年十二月八日に突入し、昭和二十年八月十五日に敗戦で終わった太平洋戦争で、他国民に与えた損害も大きかったとともに、日本人の死者・行方不明者は二百五十万人、負傷者三十二万人、そして日本人口の十分の一に当たる九百万人がその住居を失いました。

昭和五十年四月三十日、南ベトナムサイゴン政府の無条件降伏で終った南ベトナム解放戦争でも、アメリカ国防省の発表によれば、死者推定数、南解放勢力が百万人以上、サイゴン政府軍二十四万一千人、アメリカ軍五万六千五百五十五人、さらに南ベトナム民間人の死者四十一万五千人で、またアメリカ空軍の爆撃による北ベトナム一般市民の死傷が十五万人（うち死者三万人）にのぼると報告されています。直接に、人々の生命・財産への計り知れない害悪がこれらの数字によく示されています。

日本も、敗戦から三十年たちました。

いま三十歳の半ば以上の日本人たちは、一人残らず、直接にこの惨禍を体験しています。けれど、人間の記憶はいつか薄れ、子どもらに折に触れて語っているであろう父母・教師、その他の年長者・人々の話も、狭い直接体験に限られて、あれほど多くの人が限らない経験を味わった苦しさも、その百分の一も語り伝えられてはいないと思います。

わたしたちはここに、四十四人の人たちの体験を記録として集めました。ある文章は直接に書かれ、ある文章は聞き書き、になっておりますが、どれも、それぞれの貴重な人生が、あの戦争に関連した事がらばかりです。その一つ一つの体験者にとって、かけがえのない、一生のある時期に襲った大きな不幸でした。しかもその影響は、三十年後の今もなお、多くの点で深い傷跡を刻みつけているのです。

戦争で命を失った多くの人たちは、一番苦しんだ上に何も訴えることができません。戦争の苦難と悲惨な事実とを、語り伝え、書き伝えることは、生き残ったわたしたちの責務です。

ここに、父母・祖父母・兄姉そして人生の先輩たちとして、その生まるましい事実を記録にとどめて、広く若い人々に語りつたえ、日本が、世界の人類のだれもが、再び戦争に巻きこまれないために、心からの訴えといたしたいと思います。

一九七五・六・一

まえがき

I もんぺの青春

女学生時代と二人の兄の戦死	佐粧 雅子	12
ひき裂かれた青春	松井 浪子	16
看護婦日記	前田 幸枝	29
風船爆弾づくり	橋本 和子	32
戦時下に病む	赤城 和子	36
命があったら、また会いましょうね	橘 英子	41

II 疎開と飢え

学童疎開の寮母	高邑 久子	46
母の味	青木 耀子	51
疎開にろくな思いはない	野口 陽子	54
子どもにとって戦争とは	中島富美子	58

大家族	久保村千枝	62
メダカも食べた、ネコも食べた	佐野 照子	66
へびとりの名人	小林つね子	69
Ⅲ 戦時下の生活		
出たり入ったり縁の下 of 防空壕	佐藤 静子	72
乳児を負うて逃げまどう	保喜友美子	75
スパイと疑われて	沼田とみ子	82
戦争はいやだ	世良井芳子	87
長男の戦死	松田かつい	92

Ⅳ 暗い教育の場		
爆撃下の文芸ゼミナール	武藤 辰男	98
爆弾を作った小学生たち	山村みえ子	104
あの戦争前後	小池 唯則	109

V 内地で戦う

明日なき命を人間魚雷基地に生きて……………唐木田則雄……………120
弱虫学徒兵の証言……………渡辺 武……………127

一通信手の記録……………金井みき子……………138

VI 抵抗と弾圧

平和運動をして刑務所へそして戦地へ……………大久保千代……………146

昭和の暗い谷間に生きる……………石黒 周一……………159

VII 火を噴く大陸

下級兵士として送った戦地二年間の地獄生活……………大久保忠利……………170

装甲列車脱線す……………鈴木 御水……………190

VIII 国土は燃ゆる

五十キロ焼夷弾にわが身を直撃されて……………山口元之助……………202

焦土の中で……………石随喜代子……………213

Ⅳ 原爆許すまじ

しかばねの乳房		亜雁	ふゆ	219
やけあとをたずねて		杉山	千代	222
八王子空襲のあと		高野	布美瑛	227
五月二十四日の空襲		松島	初子	230

Ⅹ 無条件降伏のあと

長崎被爆記		前橋	弘子	234
ピカドン		今川	徳子	238
戦いに敗れた日から		峰岸	みよ子	246
敗戦のあとのわが家		松原	富美世	251
戦争よさようなら		布山	静江	254
満州で終戦を迎えて		松井	宏子	256
ソ連に抑留されて		曾根	麟四郎	261

故国を目の前に	藤森みゆき	270
たけのこ生活	吉田由理子	273
ポツダム宣言受諾	内山みち子	276
あ と が き		

I

もんぺの青春

女学生時代と二人の兄の戦死

佐粧雅子

「大本営陸海軍部発表、十二月八日未明、帝国陸海軍は西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」

私は十四歳、千葉県館山市にある女学校の二年生の時だ。全校生徒が雨天体操場に集まってこの臨時ニュースを聞いた。先生のお話をきいて身のひきしまる思い。大国と戦うんだ、負けたらどうなるんだらう。

私たちの年齢のものは物心ついてからずっと、満州事変、日支事変と、戦争が続いていた。私は、母が愛国婦人会の役員をしていたので、慰問袋を作るのをよく見ていた。慰問文を書かされたこともあったが、子どもの頭では、どこか遠い所、そこそ地の果てで戦争が行われているように思っていた。ところが今回は少しちがう。何となく、もし負けたら……と、不安だった。しかし、勇ましい軍艦マーチとともに報じられた真珠湾攻撃の成功やマレー沖などの戦果は、一瞬

感じた恐れを全くおし流してしまった。これが日本にとっても、私たちにとっても、今後の運命を決定する日であろうとは、だれもまだ知らなかった。

それからは学校中が戦争協力体制となった。学校の花壇の花々もいつの間にかほうれん草に変わった。田畑を借りて稲を作りさつまいもを作って供出した。校庭の隅にかまどを築いて炭を焼き、供出した。農家への手伝いで春秋の授業はなかった。防火訓練、分列行進、閱兵などはしよつちゅうやつた。

「清く正しく美しく」という学校創立のことばは棚上げされた。「本校は質実剛健が校風である。腕時計禁止。オーバー、襟巻、手袋、すべて禁止。髪の毛は二つに分けてしるるか編まねばならない。スカートははかず、モンベ着用のこと」となった。

英語の授業は三年の一学期（十七年七月）限りで廃止された。敵国語を学ぶなどとはもつてのほかだというのである。

個人はなく、すべて団体行動であった。通学団が組織され、登校下校とも、足並み揃えて手を振って行進した。荷物を持つ手は始め右で、荷物交替の号令で左手に持ちかえた。校門の出入りには「歩調とれ」「頭左（右）」と御真影庫に敬礼した。

毎週月曜日と、一日、八日は日の丸弁当と定められた。梅干しの嫌いな私は味噌漬を持って行ったが、焼いた味噌漬を持って行く者もあった。『これはうまい』というふりかけがあったが、そ

れさえもぜいたくだと叱られた生徒もいた。

毎月八日は近くの八幡神社に戦勝祈願に行った。数学の教師がその神官であった。出っ歯でギョロ目で、黒縁の眼鏡をかけたまじめな教師であった。それがボツクリをはき、烏帽子直垂えぼしひきたの姿で現われた時、およそぐわわないのと、「安房あわの高等女学校の教え人、教え子らが……」というのりとに吹き出した。だが度重なればそれさえなれた。学期ごとに往復五キロの安房神社まで歩いて戦勝祈願をした。

裁縫は布が配給なので、予定していたセーラー服上下などはできず、防空頭巾、モンペ、二部式着物をミシンで仕立てただけだった。教育勅語と開戦の詔書との書き取りをさせられた。一画でも間違つてはならなかった。

四年生代表が近くの館山航空隊に体験入隊した。他の代表が下志津の国立療養所を見学した。そこは戦争による精神障害者の療養所で、脳の手術をするのに頭を蓋のようにバックリあけるのだという見学報告がなされた。

館山航空隊への奉仕も何度かあった。兵舎の清掃や飛行場の石拾いなどをした。掃除のあと、どんぶり一杯のおしるこをご馳走になった。当時おしるこを一回作れば、あとの一カ月は砂糖なしで過さねばならないほどの配給量であったのだ。

私の長兄は十九年七月に入隊した。行先はビルマのようであった。手紙は一度きたきりで終戦

を迎えた。その間に兄嫁は男子を出産した。二十一年夏に戦死の公報を受けた。

次兄の戦死の報は半年おくれてきた。ふたりとも遺骨といって渡されたのは一袋の砂だった。弔慰金も二十円とかで、ひとり分の葬式の費用にも足りないものだった。長兄三十一歳、次兄は二十一歳であった。

長兄も次兄も戦死と知ったとき、「ああ、ふたりとも……」と母は嘆いた。父は何も言わなかったが、一週間もたたないうちに、髪の毛が真白になってしまった。

(主婦)